やまと万葉がたり

吾ご王　天知らさむと　思はねば　おほにそ見ける　和束杣山

大伴家持(巻三・四七六)

この歌は『万葉集』巻三の挽歌の部に収められています。題詞と左注によれば、天平16(744)年春に安積親王が亡くなった時、内舎人(貴族の子息が務めた天皇近侍の職)であった大伴家持が2月3日に作った挽歌3首のうちの2首目に当たります。

家持が「私の大王」と慕った安積親王は、聖武天皇と県犬養広刀自の間に生まれた皇子です。聖武の男子には、当時夫人であった光明が神亀4(727)年に生んだ皇子がおり、生後1カ月で皇太子に立てられるという異例の扱いを受けましたが、翌5年に夭逝しました。その同じ年に広刀自が安積を生んでいます。

しかし、生後間もない立太子からの早逝という異母兄の前例を避けたためか、あるいは光明の男子がさらに生まれる可能性があったからか、安積が幼くして皇太子に立てられることはなく、異母姉の阿倍内親王(光明の女子、後の孝謙天皇)が天平10(738)年に史上初めての女性皇太子となります。当時の通念では、女性天皇には次代の男性皇位継承者を後見する役割が期待されましたので、他の男子が生まれなければ安積が阿倍から皇位を継承する可能性もあり、それを望む人々もおりました。家持は、そうした安積の立太子を期待する一人であったと考えられます。

ところが天平16(744)年閏正月、聖武の難波宮行幸に供奉していた安積はにわかに脚病を発症して恭仁京へ帰り、まもなく亡くなります。数え年で17歳を迎えたばかりでした。安積の墓は恭仁京の北東にあたる和束山(現在の京都府和束町)に設けられました。

和束の地は恭仁京と紫香楽宮を結ぶ道の途中に当たり、当時の官人たちがしきりに往来した場所です。家持は、かつてこの道を通った際に何気なく見ていた和束山の姿を思い起こし、安積の突然の死を悼む歌を作ったのでしょう。

(県立万葉文化館主任研究員・竹内亮)

【訳】わが大君が天上の世界を治められようとは思いもしなかったので、以前は気にも留めずぼんやりと見ていたことだ、和束の杣山を。

忘れ草　わが下紐に　着けたれど　醜の醜草　言にしありけり

大伴家持(巻四・七二七)

やまと万葉がたり

大伴家持といえば、『万葉集』中最多の歌を残し、『万葉集』の編者かと言われている人物です。全20巻のうち巻四は相聞(恋の歌)を集めたもので、家持の若き日の恋愛模様をうかがうことができます。数々の女性と恋歌のやりとりをした家持ですが、生涯の妻となったのはいとこにあたる大伴坂上大嬢だったとみられます。「大嬢」は長女を意味し、個人名ではありません。よみかたは「おおいらつめ」「おおおとめ」など諸説あります。

今回の歌は家持から大嬢に贈った歌で、題詞に「離り絶ゆることあまた年にして、また会ひて相聞往来せり」という注があります。長年連絡が途絶えていたが、再会してやりとりが復活した、という状況がわかり、『万葉集』にみえる2人の恋愛事情の中で画期となる歌といえます。2人は天平4(732)年ごろから連絡が途絶え、天平11年(739)年に家持が先妻を亡くした後、今回の歌に至るらしく、7年間ほど隔たっていたと考えられます。

家持は、忘れ草を下着の紐につけて恋のつらさを忘れようとしたが、全く忘れられなかった、と大嬢への恋心を詠んでおり、役に立たなかった忘れ草を「醜」と罵倒しています。この語の訳し方は「馬鹿」「能無し」など注釈書によって個性が出ており、見比べると楽しめます。

「忘れ草」とは萱草(ヤブカンゾウやノカンゾウなど)のことと考えられ、中国の書物に、合歓は怒りを除き、萱草は憂いを忘れさせる、とあります(『文選』53・養生論)。

『万葉集』の忘れ草は5例とも忘れる効能ばかり注目して詠まれますが、花も美しく、ちょうど今が花の時期です。ユリに似たオレンジ色の花を見つけたら、万葉びとの見た忘れ草かもしれません。

(県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳)

【訳】 恋の憂さを忘れるという忘れ草を、私は下紐につけたのだが、このいまいましい草よ、ことばだけでした。